

の内、或日宇治見物に行しに、かの幫間が旦那宇治丸立とはいかゞと云ふに、いかさま來たこそ幸ひよきに計らへと有に心得候とて、菊屋とやらん料理屋へ至り尋ければ、亭主出て、宇治丸御所望に候やと云に、いかにも所望なりと云ふ、然らば奥へお通り下さるべしと、座敷へ伴ひ、授家内の様子甚混雜の體にて、やがて亭主上下を著し座敷に出て、先以て大慶の段有難き旨一禮をのべ、夫より盃出て、鉢物類あれこれ出せども、饅はかつて有ざれば、いかゞと思ひながら、良久しく待しに、漸く細き饅二本焼て出したり、され共つゝひて持出る體もなけれど、今少し澤山に出し候へどいへば、畏り候とて、又餘程隙入りて三本焼て出しぬ、是にて茶漬など喰ひ、酒も納めて拂ひの書付を取らんといへば、亭主お心持次第下さるべしと申に、夫にては如何なれば、是非直段聞せ候へと再三尋ねしかど、兎角御心持次第と計り申す故、かの幫間亭主を片隅へ呼び、内分にて尋ねけるに、是迄かやうなる格もあらんに、心持といふは大體いか程なるやと、亭主云ふ、是迄の格を申さば、金廿兩又卅兩申受候、至つて過分なる心持に申受候は、五十兩も御座候といふに驚き、夫は何故左様に高直にやと問ふに、いかにも高直なる譯申さんと、裏の小屋へ連行き見せけるに、大半切桶に饅數杯あり、亭主ゆびざして云、斯の如く宇治中の饅を丸で買取申候、去により宇治丸と申傳へ候、此内にて纔三五本目利仕り、料理致し差上申候、残りの饅は此宇治川へ残らず放生いたし候なり、右の様子候へば、施主の御方所望成され候こと甚稀に候へば、私祖父の代に兩度、親の代に一度御座候まゝにて、私の代にては、今日が初に候、元より此義に付、口錢世話錢申受候儀は曾て是なく候、只私の身に取て外聞にて候へば、いか程にても御心持次第つかはさるべしと申にぞ、據なく亭主を京都宿へ連歸り、數十金を渡しかへされしと也、

〔江戸名物詩 初編〕深川屋蒲焼 外 神田仲町加賀原前

蒲焼名物深川屋、魚切年中休日長、壹歩饅鱈纔一皿、喰來風味異尋常、